

## 新購入主要文献解題

### 『國譯禪宗叢書』(第1輯第1~12卷)(第2輯第1~10卷)

昭和49年 国民文庫刊行会編 第一書房出版

彭 国躍

本叢書は、宋代から明代(約12~17世紀)の間に書かれた中国の禪宗語録と室町時代に書かれた日本漢文による禪宗語録をまとめた原語と和訳本である。この叢書は、中国と日本の間の宗教、思想、文化の交流史を研究する場合においてだけでなく、日本の漢文受容という言語接触研究においても、現代中国語の成立という言語史研究においても重要な文献である。中国において10世紀以降は、文語体「文言」と口語体「白話」の併存が続いていたが、早期の口語体の文献は現代中国語の語彙や文法の形成プロセスの記述研究にとって貴重な資料となる。この叢書は日中文化交流史研究、言語接触研究、中国語通時論研究などの基礎資料として活用されることを期待している。

### 『雲南民族口伝非物質遺産総目提要』全六冊

同上編纂委員会 雲南教育出版社 2008年6月

山口建治

本書は、2002年から5年間をかけて行った現地調査により、蒐集された雲南の傣・蔵・彝・納西・白・壮・哈尼・苗など26の少数民族の「口伝非物質文化遺産」(口頭伝承の無形文化財)23,000余種を3つの巻で収録する。《神話伝説巻》は、創世神話5,100余種を、《民間故事巻》は、幻想故事5,200余種を、《史詩歌謡巻》は、情歌10,000余種をそれぞれ掲載する。

この書の出版意義は、雲南各民族の歴史文化研究の深化発展に資すること、目録学の内容を豊かにし広げたこと、口伝非物質文化遺産の伝承普及の促進に資すること、民族の団結、調和社会建設役立つことなどであるという。

## 新購入主要文献解題

長崎盛輝著 「譜説 かさねの色目配彩考 上・下巻, 解説」(京都書院)

大部なもので、図書というよりは「置物」に近い。限定 500 部中、34 番という記載がある。まずこのような高価な図書の購入を承認して下さった研究所の鳥越輝昭所長および常任委員の方々に謝意を表したい。今年度少なくとも 1 人の学生がこれを用いて卒論を完成させた。ゼミの性格上今後継続して学生が利用することになろう。また解題者も手元に置いて日々鑑賞しているところである。

「かさねの色目」とは「重色目」または「襲色目」と記されるが、前者は袷仕立の衣の表裏の裂を重ね合わせた色を指し、後者は装束としてその衣を何枚も重ね着してその表にあらわれる衣色の配列を指す(同書 解説)。「色目」は「色のパターン」、「配彩」は「配色」といった意味である。平安朝以来わが国で発達してきた独特の配色の考え方である。

本書では上巻に 196 種の重の色目が、下巻に 98 種の襲の色目が収録され、それぞれ多くの代表的な色譜が解説と共に添えられている。文字通り見るだけでも飽きない色彩の配色美術館である。色彩に関しては、江戸前期の儒者木下順庵が、「色ノ文字ニナリテハ、詩人文人ノ言ハ何ノ益ニ立タズ(中略)、色バカリハ言ウヲ以テハ伝フベカラズ。是レ此色ト見スルヨリ外ナシ・・・」と記したごとく(同書 解説)、まずは見ること、体験することである。

しかしその色目を表わす言葉もすばらしい。季節的に重の色目の「梅」の項を見ると、梅、一重梅(ひとえうめ)、梅重(うめがさね)、裏梅(うらうめ)、白梅、紅梅、紅梅匂(こうばいのおい)、蒼紅梅(つばみこうばい)、裏陪紅梅(うらまさりこうばい)、雪下紅梅があり、それぞれ異なる色目が配されている。

一輪の梅の花からこれだけの色彩の組み合わせを連想することは、果たして現代の私たちの感性からして可能なのだろうかと思う。千年前の人々の、自然の移ろいに敏感に反応し、その感性を研ぎすました情景にただただ思いを馳せるのみである。

(人間科学部 三星宗雄)